

出しとして掲げ、詩題以外は、一句の全体を掲げ、数字を冠して詩中の何句目かを示す。書名は『 』で括り、作品名は《 》で括る。

私解は確信に基づくものから、単なる想像に過ぎないものまで千差万別である。いずれについても読者の皆様の忌憚のないご批正を賜りたい。また、元慶七年の12年後、寛平七年に裴廻が再び来朝した際にも、道真は詩を唱和している(『菅家文草』巻五)が、それらの詩の読解については拙稿「菅原道真寛平七年対渤海使唱和詩読解についての私見」(『鳴尾説林』第10号、2002年)のご垂覧を乞う。

一 道真《去春詠渤海大使与賀州善司馬贈答之数篇今朝重吟和典客国子紀十二丞見寄之長句感而玩之聊依本韻》

【詩題】『菅』には何ら言及がないが、このままでは前半部が意味を成さない。私は「去春詠」と「渤海大使」が転倒しているものと見て、次のように訓む。

渤海大使、去春、賀州の善司馬と贈答するの数篇を詠み、今朝重ねて吟じ、典客国子紀十二丞寄せられたるの長句に和しぬ。(予)感じて之れを玩で、聊か本韻に依る。

意味は「渤海の大使は今年の春、加賀の国の掾と数篇の詩を互いに贈答なさり、今日は又、典客国子の紀十二丞、即ち紀長谷雄が寄せた七言律詩に和された。私はそれらの詩の唱酬に感心し、面白く思ったので、私もちょっとそれらの詩の韻を使って詩を作ってみよう」ということであろう。

【6 饒君遇境富文章】『菅』は「饒れらくは 君が境に遇ひて 文章に富みたまはむことを」と訓み、「君がそれぞれの境地にふさわしく詩を詠じて、豊かな藻思を楽しまれることを自由になさったらよろしい。(私は何もいうことはない、君はすでに旧年上陸以来先鞭をつけておられる。)饒は、人に対して棋などの立合いで先手をゆるすこと」と解しているが、如何なものか。『漢』は「饒」の引申義として「憐」の意を挙げ、その用例の一つとして白居易の《喜小樓西新柳抽条》の「為報金堤千万樹、饒伊未敢苦争春」を引いている(⑫577)。これが当てはまるであろう。その場その場に応じて見事な詩を作ることのできる裴廻の才能に感心しているのである。

二 忠臣《継和渤海裴使頭見酬菅侍郎紀典客行字詩》

【7 文場閔得何珍貨、8 明月為使秋雁行】『田』(本詩担当は井野口孝氏)は「文場に閔得たるは 何なる珍貨ぞ 明月使ひをなす 秋雁行」と訓み、「この詩の贈答の場でみつけたしたのは、何と珍しい宝であろう、大使の詩には、明月が使いとなり、秋の雁が列をなして飛び行くような美しさがある」と訳している。なお、「何珍貨」については「なんとめずらしい財宝であることよの意で、裴廻の優れた詩をさす」との解説も施されている。以上の解釈を検討してみよう。

まず上句の「何珍貨」であるが、「何」を感嘆の副詞として使う場合は、次に来る形容詞は文の述語として働くのが普通であり、この形容詞が次に来る名詞を修飾することはない。即ち「貨何珍也」(この場合、語法上「也」などの句末助詞を補うのが一般的であろう)とはなるが、「何珍貨」とはならないのである。とすれば、この場合の「何」は疑問代詞ということになり、「どのような」の意に解するしかないのである。従って本句は「文人の集まったこの場所でどのような、珍しく貴重な品物を見つけましたか」ということになる。訓みは「文場 何れの珍貨をば閔得たる」となる。そして、本句の主語はあなた、即ち裴廻であり、「文場」は日本の「文場」、具体的には渤海使の接伴に当たっている忠臣・道真・長谷雄らの文人たちを指していると考えられる。以上を総合すれば、本句は忠臣が裴廻に向かって、「あなたのような優れた才能をもった人から見れば、我々日本の文壇には大した詩人や作品は見つからないでしょうね」と問いかけたものだということになる。

次に下句であるが、まず「明月」の語の意味の二重性に注目しなければならない。『漢』によれば、この語には「光明的月亮」の意と共に、「明珠」の意もある。『楚辞』九章《涉江》に「被明月兮珮宝璐」とあり、その王逸注に「言己背被明月之珠」とあるのがその出典である(⑤597)。とすると、この「明月」は本詩の前に作られた上掲の道真の《去春詠渤海大使…》で裴廻の詩を評して「掌上明珠舌下霜」と詠んだのを、意識的に承けたものであることが明白になり、従って本詩の「明月」も又裴廻のすばらしい詩作の比喩として使われている

ることが確実になるのである。

次に、句全体の意味は「行」の字をどう解するかによる。本字は多読字で、その読音の違いに応じて意味も異なるが、本詩において本字は韻字であり、陽韻の「霜」「光」「郎」「章」と押韻する形になっているから、同じく陽韻の胡郎の切で読まなければならないことになる。この読音に限定すれば、本句に当てはまる意味は「排列」(③ 886)しかあり得ない。従って本句の訓みは「明月為に秋雁をして行ばしむ」又は「…行ばしめよ」に限定されてくるのである。

尤も、本詩の後で道真が作る《重依行字和裴大使被誚之什》は、本詩と全く同じ韻字を用いながらも、第八句を「因君別渟定添行」としており、この「行」は「ゆく」の意であろうから、その読音は戸庚の切、庚韻となり、誤用ということになる。読音の種類が多い「行」だけに、読音と意味との対応関係を正確に把握することが、当時の日本の文人には難しかったのかもしれない。忠臣の作も本字を戸庚の切の場合の意味で使っている可能性が考えられるのである。次に示すように、「雁行」と熟したときの「行」字には上記のいずれの読音もあり得ることが、その可能性を一層強く感じさせる。『漢』によれば、「雁行」には八通りの意味があり、そのうち、初めの六つにおける「行」は胡郎切で、後の二つのそれは戸庚切である。本詩の解釈に適用できそうなものを挙げれば、初めの六つのうちでは、「①飛雁的行列」だけであり、これは私が先に提示した解釈のうちの「雁行」の部分だけを名詞的にとらえたものである。後の二つは、次の通りである。

⑦側身而進。形容恭謹。《莊子・天道》：“土成綺雁行避影，履行，遂進而問：‘修身若何？’”王先謙集解引宣穎曰：“側身貌。”…⑧《礼記・王制》：“父之齒隨行，兄之齒雁行，朋友不相踰。”陳澧集說：“父之齒，兄之齒，謂其人年与父等，或与兄等也。隨行，隨其後也；雁行，並行而稍後也。”…

これを要するに、⑦は尊者に対する礼をとって斜め後ろに身を避けて進むこと、⑧は並びつつも、少しばかり遅れて進むことである。韻こそ違え、以上のような意味やニュアンスも生かされていた可能性は否定できぬように感ぜられる。

「為」の字についても触れておくと、ここは「因而；因此。表結果」(⑥ 1107)の用法だろう。上句で日本の文壇には大した詩人や作品がないことを述べたので、それを承けて「為」を使ったのである。

なお、月が雁行をリードするということははっきりと詠んだ先行作品は今のところ見つからないが、初唐の駱賓王の《同張二詠雁》に「陣照通宵月」とあり、同じく《秋雁》に「帶月凌空易」とあるのなどは、雁が月の明かりに助けられて飛行する様を描いたものであり、参考までに挙げておきたい。

三 忠臣《敬和裴大使重題行韻詩》

【詩題】『田』(本詩担当も井野口氏)は「敬みて裴大使が重ねて行韻を題す詩に和す」と訓んでいるが、「題」は「書写、題署」の意(⑫ 325)であるから、「韻」はその目的語とはなりにくい。ここは「…重ねて題する行韻の詩に和す」とでも訓むべきである。

【5 覚悟当時希驥乗(原注：来章有一驂希麻驥駉)，6 商量後日对竜章】本二句は難解であり、『田』は、「やっと分かりました、大使はいま駿馬に跨がるごとく立派な詩を作ろうとねがっていらっしゃることを〔頂いた詩章に〕文学の達人のごとく、一度、すばらしい(?)良馬を走らせてみたい」とありました、これから先に思いを致します、後の日に天子の詩章に接せられることを」と訳しているが、恐らく正解とは言えまい。本二句の解釈に当たっては、やはりまず裴廻からの来章中の一文の意味をはっきりさせねばなるまいが、この一文からはこのままでは一つの纏まった意味を読み取りにくく、誤字が含まれているのではないかと考えられる。私見では、「麻」を「麾」の誤りと見れば、一応まともな中国語になり、「一たび驂するや希ふ驥駉を麾かんことを」と訓める。「驥駉」は、これを転倒した「駉驥」が後漢の張衡の《南都賦》等に見え、駿馬のこと。裴廻がこの一文によって言わんとした所は多分、自分は一旦詩の応酬を始めたなら、詩才の優れた人たちを呼び寄せたい、即ち優秀な人たちを相手に詩の応酬をしたいというような意味なのであろう。

次に第五句の意味を考えてみよう。「当時」は、第一句において作者がこの十二年間待ち続けてきたということが歌われていることからすれば、十二年前の渤海使来朝の当時ということになる。ただ、裴廻自身は今回が初めての訪日で、十二年前には来朝していないから、「驥乗を希ふ」が解せなくなってしまう。この点を解決するためには、次の二通りの考え方があり得よう。一つは、詩の応酬の相手に優れた人材を望

むと表明したのは今回の裴翹だけではなく、これまでに来朝した渤海使は大抵皆同様のことを表明したのであるということ。もう一つは、「希」の意味を本詩においては「まれなり」と解すること。この意味なら、訓みは「覚悟す 当時 驥乗希なりしを」となる。

次に第六句であるが、「竜章」の意味を正しく把握せねばならない。『漢』はこの語の用法を六通りに分けて説明している(⑫ 1480~81)が、「対皇帝文章的諛称」という用法の例としては明・清のものしか挙げられていない。私は『漢』が「喩不凡の文采、風采」とする意味、中でも「文采」の方が、本詩のこの語には当てはまるのではないかと思う。『漢』が挙げている用例の中では、李白の《冬日于竜門送従弟京兆參軍令問之淮南觀省序》の「觀夫筆走群象，思通神明，竜章炳然，可得而見」がこれに該当する。ここの「竜章」は李白が従弟の李令問の「筆 群象を走らす」文才を言ったものである。

以上を総合すれば、本二句は次のように解すべきであると思う。——十二年前に貴国の使節が詩の応酬の相手として優れた人材を望まれた(或いは我が方に優れた人材が少なかった)ことを強く意識してきたので、後日(=今回)は何とかあなたの非凡な文才に釣り合うことができるようにと相談してきたのです。——なお、第五句の「当時」は今日の時点に立って前回のこと(十二年前)を想起するものであるのに対し、第六句の「後日」は前回の時点に立って今日のことを言うものであるから、本二句は時間上の視線がオーバークロスすることによって、立体的なイメージを帯びた対句となっている。

四 道真《重依行字和裴大使被訓之什》

【3 灌溉梁園為墨客，4 婆娑孔肆是查郎】『菅』は「私は梁園に招かれた文人墨客の流れをくんで、文学の勉強をした。私はまた儒学の勉強をして、官吏の道をめざしたものだ」と解しているが、如何であろうか。私は両句とも主語は「私」ではなく、「あなたも私も」であると思う。なぜならばこれより前の第一・二句は「寒松不變冒繁霜，面礼何須仮粉光」(松は寒い冬にもいつもと変わらず、繁く降る霜をも凌ぐ。操をしっかり執り守っている人は常に変わらぬ姿を人の前に見せるものだ。だから、対面してこのような公的な交流を行う場合も、外面を粉飾する必要はない——私解)というもので、多分裴翹のやや堅苦しく他人行儀なのをリラックスさせようという意図から出たものだろうと見られるので、これを承けて本二句は道真が裴翹と自分との共通点を挙げて、親しみを示そうとしたのだろうと考えられるのである。なお、「婆娑」を『菅』は「歩きまわるさま」と解するが、ここには「奔波; 勞碌」(④ 376)の意味が最もふさわしいと思う。

【5 千年豈有孤心負，6 万里当憑一手章】『菅』は「孤心」を「いやしいおろかな心」と解しているが、私は『漢』がこの語の訳語として記している「孤高の心懷」(④ 214)がここには最もよく当てはまると思う。この語は第一句に述べられた松に象徴される常に変わらぬ節操と、イメージの上で繋がっている。そもそも中国では古来、松を詠む場合には『論語』子罕篇の「歳寒，然後知松柏之後彫也」に結び付けて、これを人の孤高な心性になぞらえることが多い。その例は「亭亭山上松，瑟瑟谷中風。風声一何盛，松枝一何勁。冰霜正慘悽，終歳常端正。豈不罹凝寒，松柏有本性」と詠んだ三国魏の劉楨の《贈従弟三首》其二などを初めとして枚挙に暇がないが、『漢』が「孤心」の用例の一つとして挙げている明の呉承恩の《移竹寺中得詩》其七の「落花衆芳外，蒼蒼千尺松。孤心誰見賞，今日得相従」が、時代は遙かに下るけれども、「松」と「孤心」のイメージ上の結び付きを示す恰好の例である。この種の作品としては、日本でも古く『懷風藻』に中臣大島の《詠孤松》があり、「隴上孤松翠，凌雲心本明。餘根堅厚地，貞質指高天。……」と詠んでいる。以上の理由により、「孤心」は裴翹の、松のように常に変わらぬ孤高な心と言うものであるということになる。

第六句を『菅』は「万里を隔てても、大使手識のこの文章をより所とするであろう。手章は、手ずから書きしるした手紙の文句」と解するが、私は裴翹の文才について言ったものと見る。又、「一手章」は「一手+章」という構成であると思う。なぜならばこれと対になる「孤心負」は明らかに「孤心+負」という構成だからである。以上を踏まえて本句を解釈すれば、あなたは万里どこへ行っても、そのおん手で作る詩や文を抛り所となさるに違いない。即ち、どこへ行っても、その文才によって名声を博することができるだろうということである。

本二句合わせて裴翹の堅い節操と優れた文才を褒め讃えたものであり、それぞれの句に時間と空間の果てしない広がりを表す語を使ってイメージ化することにより、彼の人物の並々ならぬことを強調している

のである。

五 道真《過大使房賦雨後熱》

【詩題】『菅』は「大使の房を過ぎて、…」と訓むが、「大使の房に過^{よぎ}りて、…」と訓むのが正しい。

【3 揮汗春官応問我，4 飲氷海路詎愁君】『菅』は「春官」について「周礼六官の一．礼法・祭祀を掌る．ここは礼部省即ち治部の役人たちをさす」とする(頭注)が、この語が下句の「海路」という空間を表す語と対になっていることに注意するならば、ここでは「礼部省即ち治部」という役所の空間を指していると思なければならぬ。さて、『菅』は本二句を「汗を揮ひて 春官の我に問ふべかりしも 氷を飲みて 海路詎ぞ君を愁へまゐらせむ」と訓み、頭注において次のような解釈を示している。

(今日はこんな大雨がふって、すごく暑いので)治部の役人が、汗をこぼしながら治部大輔たる私に(裴大使に失礼ではなかろうかと)心配して相談したのはもっともだったけれども、春官は、周礼六官の一．礼法・祭祀を掌る．ここは礼部省即ち治部の役人たちをさす．……氷を飲みながら、日本海を渡って帰航すればいいから、君の旅路を少しも心配していない。帰路の船には、加賀の氷室(ひむろ)の氷を積みこむ手はずもできていたのであろう。

しかしこのように七言の句の内容を前二字と後五字に分けて解釈することは、できるだけ避けるべきであろう。本二句の場合も、通常の如く「汗を春官に揮ひたれば……、氷を海路に飲みたれば……」と訓むことは十分に可能で、「汗を春官に揮ひたれば 応に我に問ふべきも、氷を海路に飲みたれば 詎ぞ君を愁へん」と訓めばよいと思う。意味は「私が治部の役所でひどく汗をかいた(臨時の治部大輔を仰せつかって奮闘していることの比喩であろう)と申し上げたので、あなたのご心配になって私にお尋ねになるのは尤もですけれども、あなたは日本に渡って来る船の中で氷を飲まれたはずで、それが今でも効いているでしょうから、ひどく暑いからといってあなたのことを心配する必要はないでしょう」とでも解釈すべきである。因に本次の渤海使は元慶六年十一月十四日に加賀国に着岸した(『三代実録』卷四十二)。第四句前半は真冬の海を渡って来たことを誇張して表現したものであろう。「飲氷」の語は『莊子』人間世篇に由来して「恐れ戦く・落ち着かない」といった意味を表す典故となっていて、これは真冬の海を渡って来る間の裴廻の気持ちを想像したものとして表面的には当てはまらないこともないが、ここでは当てはめない方がよいと思う。なぜならば、この語は『莊子』人間世篇では「今吾朝受命而夕飲氷」という文脈で使われており、これは命令された任務を実行できるかどうかと我が身を振り返って心配する意味合いであって、これを裴廻の渡海、ひいてはこの時の使行の任務に対して使うと、彼の器の小ささを見下すニュアンスが生じてしまうからである。

【6 淡水当添酒十分】『菅』は「淡水」について「鴻臚館のほりを流れる堀川の流れをさすか」と注するが、『唐』の指摘にある通り、寧ろ「君子之交淡如水」(『莊子』山木篇より出る)の寓意と見るべきであろう。

【7 言笑不須移夜漏，8 将妨夢到故山雲】『菅』は頭注で「夜の漏刻の時間の目盛がうつらないでほしいと願う。あなたが床に就いて、故郷の夢をみることを妨げたいものだ」という解釈を提示しているが、これ又『唐』の「我們的談笑，不必進行得很晩，否則睡覺時間太短，将夢不到故郷的雲山」という解釈の方がより自然であると思う。

六 忠臣《過裴大使房同賦雨後熱》

【1 冒熱尋来逼戸帷】『田』(本詩担当は谷口孝介氏)は「尋来」を「尋^ついで来^{きた}りて」と訓むが、『全』が「尋^{たづ}ね来りて」と訓んでいるのが正しい。

【3 三更会面応重得，4 四海交心難再期】本二句は思うに作者がこの夜の自己の体験に二点の非日常性を見いだして、両者の間の軽重の差を述べたものであろう。非日常性の一つは真夜中まで客の接待をすること、もう一つはもともと遙かに相隔たつて暮らしてきた者同士が心を通わせるということ。前者は実現させようという気になれば、いつでもできることだが、後者は海の彼方に住む人が相手でなければできないから、より貴重な経験なのである。『田』は第四句を「一旦大使が帰国してからはこの国で心を通わすことはもうあてにはできない」と訳しているが、原文にない「この国で」などという言葉をやや補う

と、原文のもつ一般論的なニュアンスが殺がれてしまう。

【5 不是少郎無露胆，6 偏因大使有風姿】『田』は第五句は「第四句で謳われたことをうけ」、第六句は「第三句で述べたことの原因を詠む」と見て、本二句を「再び心を通わすことができないのは、小生にまごころがないためではない、今後真夜中までお目にかかれる機会がもてるのは、ただもう大使のすばらしい風貌のおかげである」と訳している。まず細かいことながら、「風姿」を「風貌」と訳するのは、如何なものか。『漢』はこの語を「風度儀態」(⑩ 606)と釈している。風采や物腰・態度といった所であろう。さて、本二句については下句が上句の理由を説明する構造になっていると見なさぬ限り、文意が通じない。即ち、私が(深夜まであなたと一緒にいて)真心を披瀝しなかったわけではないのは、偏にあなたが立派な風采と物腰を備えた方でいらっしゃるからだ、と解するしかないと思う。訓読は「少郎の胆を露はす無きに不是ざるは、偏に大使に風姿有るに因る」とでもなろう。

七 道真《醉中脱衣贈裴大使叙一絶寄以謝之》

【3 座客皆為君後進，4 任将領袖属裴生】『菅』が言及していないので一言するが、本二句の表現には『世説新語』賞誉篇の「胡毋彥国吐佳言如屑，後進領袖」の一文が意識されていることが明白なので、言及すべきであると思う。即ち、裴廻は鋸屑のように次から次へと名句を吐き出す人だという賛嘆が込められているのである。

八 忠臣《同菅侍郎醉中脱衣贈裴大使》

【1 浅深紅翠自裁成】『田』(本詩担当は栗城順子氏)は「自」を「みづから」と訓んでいるが、「おのづから」が正しい。もっとも、『田』自身、注においては「[自]はそれ自身で、の意。自然にそうであること」と釈している。

【4 他時引領暗愁生】『田』は「…暗に愁を生ぜむ」と訓んでいるが、無理であろう。『全』が「暗愁」を「人知れぬ愁い」と解し、「暗愁生ぜむ」と訓んでいるのが正しい。白居易の《琵琶行》に「別有幽愁暗恨生」の句がある。

九 忠臣《酬裴大使答詩》

【2 客情歡慰主人情】『田』(本詩担当は内田賢徳氏)は「客情 主人の情を歡慰す」と訓み、「旅にある客たる大使の情が、主人側の私たちの情をよろこばせ、なごめる」と訳しているが、『田』自身も言う通り、「歡慰」は「用例未見」の語なので、この二字を一熟語として扱うことには躊躇を覚える。私は「客情歡びて慰む主人の情を」とでも訓み、「客であるあなたたちが喜んで下さって、そのことが主人である私たちの気持ちをほっとさせてくれる」の意と理解する。

【3 与君共是風雲会】『田』は「君と共にするは 是れ風雲の会」と訓み、「あなたと時を共にしたのは、これぞ風雲の会」と訳している。この解釈においては、「是」は「表示肯定判断之詞」(⑤ 659)ということになるが、私はここでは「代詞。此、這;這裏」(同)と解する方が適切だと思う。即ち「君と是の風雲の会を共にして」という訓みになる。この方が次句への繋がりも滑らかである。

十 道真《二十八字謝醉中贈衣裴少監酬答之中似有謝言更述四韻重以戲之》

【詩題】『菅』は「二十八字もて、謝して醉中に衣を贈れりき。裴少監、酬答の中、謝する言(こと)有るが似(ごと)し。…」と訓んでいるが、これは道真の言わんとする所をとらえた訓み方とは言えない。本詩が詠まれた経緯は次のようなことであろうと想像される。即ち道真が先に上述の《醉中脱衣贈裴大使叙一絶寄以謝之》という詩を詠んで、裴廻に衣を贈った。これに対して、裴廻も同じく七絶を詠んで、道真に対する感謝の念を述べた。そして道真が更にそれに対する返答として、本詩を詠んだ。裴廻の詩は今に伝わっていないが、以上のように考えるのが妥当な所であろう。詩題はそのような経緯を十全に表し得た正当な漢文になっているとは言い難いが、本詩作成の経緯として以上のような事実関係があったことが確実である以上、作者の意を汲んで訓んでやるしかあるまい。以上の理由により、詩題は「二十八字もて醉中衣を

贈りたるに謝せる裴少監の酬答の中に、…』と訓むべきである。その意味は「私が酒に酔って衣をプレゼントしたのに対して、裴少監は七絶を作って返して下さった。その七絶の中に、どうやら私に対する感謝の言葉が述べられているように読み取れる。そこで私も今度は更に四韻の詩(律詩)を詠んで、言葉の戯れを試みよう」とでもなろう。

【1 不堪造膝接芳言，2 何事来章似謝恩】『菅』は上句を「会話が十分にできないことをいう。一句は、膝をすすめて、友情の会話をかわすけれども、(会話が十分にできないから)はっきりとは心持をやりとりすることができにくい」と解しているが、誤りである。まず「芳言」の意味をしっかりと読み取らねばならない。「芳」は「芳辰」「芳姿」等のように「すばらしい」の意味で使われる場合や、「芳札」「芳意」等のように相手のものを敬って使われる場合などがあるが、この「芳言」はこの二通りの用法を兼ねたものと見ることができる。つまり、あなたのすばらしいお言葉(具体的には应酬する詩の言葉)ということである。次に「不堪」であるが、ここでは「不能承当;不能勝任」(① 447)の意味が最もよく当てはまる。そこで、本句の意味は「膝を交えて、あなたのすばらしいお言葉に接するだけでも勿体ないのに」となり、「今下さったお返し詩の中に私に対する謝意がこもっているように読み取れるのは、どういうわけであろうか。益々勿体ないことだ」という意味の第二句へと続くのである。

【6 君定曳裾到旧門】「曳裾王門」という典故がある。前漢の鄒陽が呉王劉濞への手紙の中で「飾固陋之心，則何王之門不可曳長裾乎」と述べたことを踏まえ、「在王侯権貴門下作食客」を比喻するもの(⑤ 580)であり、本詩ではこれを捻って、裴翹が本国へ帰還してからのより一層の栄達というような意味で使っているものと見られる。

十一 道真《依言字重酬裴大使》

【2 何関薄贈有微恩】『菅』は「微恩」を「ちょっとした恩義」と解しているが、この場合の「恩」は「恩義」とはやや違うように思われる。『漢』に「②情愛;寵愛。…③感恩，感謝」とある内の「情愛」「感恩」辺りの意味であろう。

【3 手勞機杼營求斷，4 心任裁縫委曲存】『菅』は第三句については、

一句は、手ずからはたを織って、せっせと織り上げた布地をはかりもとめて裁断したの意か。「機杼」は、はたのひ。転じて、はたのこと。「營求」は、存疑。

と注し、第四句については「心にまかせて裁縫して、仕立てに一つ一つ細かい心遣いを行き届かせた。委曲は、細かいことが一つ一つ行き届いていること」と解しているが、いずれも不十分な解釈である。

第三句の「營求」という語については、『漢』の「謀求;追求」という釈義(⑦ 267・268)が当てはまるだろう。『漢』はその用例として『魏書』李崇伝等三例を挙げている。「機杼」の本義は勿論「はたのひ」であるが、ここでは同時に『漢』が「比喻詩文創作中的新巧構思和布局」(④ 1325)とする使い方もなされていると見るべきである。この用法の例として『漢』は『魏書』祖登伝の「文章須自出機杼，成一家風骨，何能共人同生活也」や、時代は下るが、宋の沈作喆の『寓簡』卷九の「文章固当以古為師，学成矣，則当別立機杼，自成一家」などを挙げている。これらはいずれも褒義であるが、本詩のそれはどちらかと言えば貶義ということになる。即ち本句は機織りを譬えに使い、「小手先でやたらと新奇な着想や構成ばかりに骨を折っていると、自分が本当に伝達しようと思っていることを伝達する道は却って遮断されてしまうものだ」ということを述べているのである。

これと対句になる第四句について次に考えよう。「委曲」は、「存」の主語となっていることと、これに対応する上句の「營求」が名詞的に使われていることからして、どうしても名詞と見なすしかない。『漢』の釈義の中で「委曲」の名詞としての用法のうち、ここに当てはまるのは「事情的原委;底細」(④ 324)のみである。本詩においては「我が心の最も奥にあるもの、衷心」といったような意味になろう。「裁縫」は、上句の「機杼」と同様、表面上の意味のみではなく、比喩的な意味をも兼ねているであろう。それは何かと言えば、言葉を切り取り、繋いで美しい詩を作ることである。以上のことに基づいて本句の意味を考えるならば、「(小手先を弄するのではなく)心の中から自然と湧き起こってくる言葉の数々が互いに即いたり離れたりして、綺麗な綾模様を織り成していくその営みに任せておけば、我が胸の奥底にある思いは自ずから、そ

のできあがった綾模様，即ち詩の中にももっているはずだ」ということになる。第一句の「多少交情見一言」と表裏をなす表現である。

因に，本二句に似通った詩句として，大津皇子《述志》の「山機霜杼織葉錦」(『懷風藻』)がある。

十二 道真《夏夜於鴻臚館餞北客歸郷》

【6 客館争容数日厨】小島氏の指摘(『王朝漢詩選』岩波文庫，1987年)にあるとおり，「厨」の字は「厨」に作るべきである。

十三 忠臣《七言夏夜於鴻臚館餞北客歸郷一首》

【4 扶桑恩極出蓬壺】『田』(本詩担当は山本登朗氏)は「扶桑」について「明確に日本そのものの意に用い」，「蓬壺」についても「〔扶桑〕と同様，東海に位置する日本のことをこう呼んでいる」とする。しかし一句の中で同一のものを二通りに分けて呼称するのは，極めて不自然なことであり，また限られた字数の中で一字一字を大事に扱わなければならない漢詩においてはあり得ないことであろう。「蓬壺」については『全』が「神仙の住む三山の一つで蓬萊山のこと。ここは宮中を指す」とするのが当たっている。本句の意味は日本でのもてなしもクライマックスに達して，あなたがたはまもなく宮中，すなわち宮殿のある京の都を出て行くということである。訓みは「扶桑の恩極まりて蓬壺を出づ」となる。

【7 鄭重贈君無異物，8 唯餘泣別滿中珠】『田』は下句の「中」字について「底本等諸本に『中』とあるが，そのままの形では意味を解しがたい」として「巾」に意改した上で，本二句を「心をこめてあなたに餞別を贈ろうと思っても，特にこれといったものは，何もない。あなたに贈るにふさわしいものとしてはただ，別離を悲しんで私が流す，手ぬぐいに満ちあふれるほどのこの涙の珠があるばかりだ」と訳しているが，いかがであろうか。わたしの感覚では，「手ぬぐいに満ちあふれる涙の珠」はいささか無粋であるし，そもそも涙は手ぬぐいの上に落ちたら，手ぬぐいに染み込んでしまって，もはや珠ではなくなってしまうのではないだろうか。

ここは「中」の字をわざわざ意改までする必要はない。「中」が何の中であるかは，本来読者の自由な想像に委ねられているのである。ただ，『田』自身が本句の表現に関連するものとして「鮫人」の説話を指摘しており，その線で考えていけば，何の中なのかについては自ずと答えが出るのではなかろうか。この説話を記したものの中でも最も古いと思われる晉の張華の『博物志』巻九から引用すると，次のとおりである。

南海外有鮫人，水居如魚，不廢織績，其眼能泣珠。従水出，寓人家，積日売絹。将去，従主人索一器，泣而成珠，滿盤以与主人。

もし詩の送り手と受け手とがともにこの典故を意識していたとすれば，特に言及しなくとも，暗黙のうちに「満盤」の珠であることは伝わるのである。また，『唐』は本句を「只有剩下的洒滿杯中的淚珠了」と解しており，それも悪くはなかろう。なお，辛夷・成志偉主編『中国典故大辞典』(北京燕山出版社，1991年)は「泣珠」はその後「知恩報遇」の典故として用いられるようになったとして，西晉の左思の《吳都賦》から「泉室潜織而卷絹，淵客慷慨而泣珠」の句を，また唐の李頎の《鮫人詩》から「泣珠報恩君莫辞，今年相見明年期」の句をそれぞれ用例として引いている。忠臣がこの「泣珠」の故事を強く意識していたとすれば，本句の表現には渤海使との別離の悲しみだけでなく，彼らに対する「知恩報遇」の念もこめられている可能性が考えられることになる。

十四 道真《訓裴大使留別之什》

【1 交情不謝北溟深，2 別恨還如在陸沈】『菅』は上句を「交情は北溟の深きに謝せず」と訓んで，「交誼の友情は，いつまでもかわらず，北海の深い水にも沈み去って見失われたりすることはないはずである」と解しているが，如何であろうか。ここの「謝」は「遜讓；不如」の意(⑩ 374)であると見られる。従って「交情は北溟の深きにも謝らず」とでも訓むのがよい。意味は勿論「友情は北海の深さにも劣らぬほど深い」ということである。

次に，『菅』は下句を「別恨は還りて陸沈に在るが如し」と訓み，

(北海の水には沈まないけれども,)かえってお互いに儒生として、陸に沈むくらしをすることを思うと、別れがたい情が切切としてわいてくる。

と解し、更に補注では、

「陸沈」は、道を守って融通のきかないこと。水に沈むのではなくして、陸に沈んで世俗の中に市隱の生活をおくること。

と説明し、『論衡』と『抱朴子』における「陸沈」の用例を挙げている。しかしこの解釈や説明は私には牽強附会としか感じられない。確かに「陸沈」は熟した語であり、様々な意味で使われてきた。『漢』の分類によって示すと、「①陸地無水而沈。比喩隱居。②比喩埋没，不為人知。③比喩国土淪陷于敵手。④愚昧迂執，不合時宜。⑤謂陸地沈入海底」となる(但し⑤については現代の用例しか挙げられていない)。しかしながら、いずれの意味を採るにしても、「在」に後接するのは無理である。ここで再び本二句の全体を眺めてみると、それぞれの第五字「北」と「在」が対応するものになりさえすれば、対句を構成し得ることに気づくであろう。つまり、「在」の字は恐らく誤りで、下句の下三字は、上句下三字の「北溟の深き」に対応して、「?陸の沈む」とならねばならないのである。ここからは私の単なる想像に過ぎないが、南方の大地を指す「丹陸」(① 685)が平原や陸地の意味の「平陸」(② 935)辺りが最もふさわしいと思う。即ち、いずれにせよ、下句は「別恨は還も丹(平)陸の沈むが如し」と訓み、「別れの悲しみはまるで(南方の?)陸地が沈んでしまうかのように、極めて大きな衝撃である」とでも解すべきだということになろう。

【3 夜半誰欺顔上玉】『菅』は「夜中に、流れ出る大粒の涙を、顔上の玉だと欺くことができようか」と解しているが、「顔上玉」は涙を飾って表現した語に過ぎまい。寧ろ「夜半」の語をもっと重視すべきだと思う。即ち「夜半で真っ暗といえども、顔を流れ落ちる玉のような涙をごまかすことができようか」とでも解すべきである。

【6 遠妬花開旧翰林】『菅』は「またあなたは故国の文苑に美しい詩文の花をひらかせ、めざましく活躍されることであろう。私は空しく、はるかにそれを見て、うらやむばかりである」と解しているが、「妬」は本義の「ねたむ」の意に解する方が、本句には作者の強い気持ちがこもることになると思う。即ち、あなたは今は我々日本の文人と詩を応酬して下さっているが、帰国後は本国の文人の方々と詩を応酬されるのだろう。我々日本人はそれに預かることができなくなる。そう思うと、あなたのすばらしい作品に接することのできる貴国の方々が妬ましく思われてならない。以上のような意味であろう。

【7 珍重帰郷相憶処，8 一篇長句惣丹心】『菅』は上句を「珍重す…」と訓み、「珍重」について補注で「唐代の俗語。ありがたうよ、または御機嫌ようというほどの意」と述べて、更に張相氏の「珍重，猶云多謝也，難得也。又猶云仔細，或保重也」(『詩詞曲語辭匯積』卷六)という説明を引用している。しかしながら、張氏の原文を案ずるに、「難得也」の下に「幸虧也」の三字を脱している。ところで、張氏の説明がどのような意図で引用されたのか、よく分からないが、張氏の釈義の中でここに最もよく当てはまるのは「難得」または「幸虧」である。「珍重」の訓読は「珍重にも」とでもするしかないだろう。

『菅』は本二句を「君の留別の仕は、君が帰郷したあと、追憶のいいよすがになる、一篇の長句はすべてまごころの結晶。……」と解して、第八句の「一篇長句」と「丹心」とを裴頠のそれと見なしているが、如何であろうか。作者道真のそれと見なすべきであろう。本二句の正解は「あなたが帰郷後、有り難くも(幸いにも)私を思い出して下さる時は、あなたにお贈りした私の七律の詩が私の真心そのものですので、どうかこの詩をよすがに私のことを思い出して下さい」とでもなろう。七律の詩とはまさしく本詩であろう。